

現代社会の課題(保育に視点を置いて)

2016.7. 遠藤清賢

現代社会の子育て環境は、この地域に於いても核家族で対応していることが非常に多くなっています。20年位前であれば、0歳児を母親一人が子育ての全てを対応していることは、珍しい事でした。しかし、年々核家族化が進み、子どもが生まれた後、子どもの対応ができない母親が非常に多くなっているのが現状です。産休や育児休暇を取得し子育てに専念できる状況であっても、どのように赤ちゃんに対応したら良いのか不安に思う母親が非常に多くなっています。そしてそのような母親に限って、近隣に相談できる人が誰もいなく孤独な生活を送っているのです。その母親たちは、おそらく自分は社会から取り残されたような孤立感や不安な思いを感じているのです。そして、不安と迷いによって本意ではなくとも自分の子どもを虐待してしまうことも有るのです。母親達の生活環境は、あまりにも個人主義になっていて、全てが母親自身の決断と行動によって対処しなければなりません。助けが必要な時途方に暮れてしまう体験を今の母親は少なからず体験していると思います。子どもができる前は、他の人に気をを使うこと等必要なく、自分たち夫婦で気ままに生活できていましたが、子どもが誕生した後は一転して不安と孤独な生活になってしまうのです。従って、多くの子どもは家族の関心に於いて基本的な信頼感を獲得することができず、自己肯定感を持つことができないまま、幼い時期を過ごしてしまうのです。その結果、陰湿な虐めや、自信の喪失、他者との良い関係を構築できない、他者を見てその気持ちを想像できない大人になってしまうのです。

もう一つ心配なことはスマートフォンなどの普及によって、母親の視点が子どもに向かなくなっている現状があるのです。母親のほとんどは携帯に集中しています。オムツを変える時も、ミルクを与える時もケータイを見ている。子どもが泣き叫んでいる時も携帯を離し、適切な対応をすることができない母親が年々増えているのです。普通、子どもが生まれある程度一定の時が経つと、母親はその子の泣き声を聞き子どもの訴えることが理解できるようになるのですが、現在の母親はその能力を失ってしまっているのです。0歳から子どもの教育は始まっているのですが、その教育の一番大切な基盤の部分教育されないのです。母親の愛情が子供の成長にとって不可欠なのですが、具体的な母親の愛情に接することができない子どもたちが増えている現状に危機感を持っているのは保育の関係者くらいしかいないのです。教育は3歳以上から始まるなどと新しい制度は謳っていますが、教育は生まれた瞬間から始まっているのです。教育も保育も表裏一体で行われるのが子育てなのです。最も大切な教育が0歳から始まるのです。それは母親の愛情に接するという事です。母親が何らかの事情によって保育できない時保育園がその役割を担っています。保育園の働きは具体的な形には見えませんが、子ども達の人間としての根本的な精神基盤

を育てているのです。保育は誰でも出来る働きではありません。子どもを理解し、子どもの心と共感し、母親の思いをくみ取りながら、子どもに母親の愛情を伝える役割を果たしているのです。そのために保育士は正しい人間理解と生きるための正しい方向性、信仰と信念を持っていなければならないのです。この部分が保育の専門性なのです。

今大きな問題になっているのが貧困の問題です。相対的貧困家庭が増加しているのです。相対的貧困とは周りの家庭の生活状況と比較することによって、その生活水準が平均以下の生活水準になっている状況です。具体的には世帯の平均年収の1/4以下の収入で生活している世帯を相対的貧困家庭として位置付けています。具体的には年収120万円くらいだと思います。月収10万円以下で生活している状況です。このような世帯は日本では15%くらいあるのだそうです。特に離婚し片親だけで生活している世帯はほぼ貧困の状態にあるのです。そして、この貧困は子どもの教育、保育に大きな影響を及ぼしているのです。子どもたちは同じスタートラインにたって成長するのですが、貧困の家庭は経済的に通常の教育や保育を受けることができない経済状況になっているのです。収入が食べるだけで精一杯な状況で毎日、崖淵を歩いているように生活せざるを得ないのです。子どもが成長してもこの貧困の状況から抜け出せないのが今の日本の社会です。この子どもたちは生まれる前から貧困というハンディキャップを持っているのです。良く言われますが貧困は連鎖するのです。このような家庭が全体の15%も存在している日本の社会は6世帯の内1世帯は相対的貧困状態にあるのです。日本の社会では何も誇る物が無いのです。日本の貧困率は世界でも5位以内のなっていたと思います。保育園はこのような状況に対応しています。収入によって保育料が異なっています。給食が提供され、教材も自己負担の無い様に対応されています。2人目は半額、3人目の子どもは無料になっています。保育園は子どもたちにとって、子育ての家庭にとってのセーフティーネットなのです。このような認可保育施設が充分にあることは大切なことですが、根本は社会の制度の仕組みにあるのです。生活保障に税金を多く分配するのは、生活保障を受ける人が多くなっているからです。そのような人たちが増加しているのは、何かしら社会的な制度に矛盾や誤りがあるからです。私たち自身も知恵を出さなければならないのです。自分たちの生活のあり方を、生き方を、見直さなければなりません。

日本の子育ての現状は非常に危機的な状況にあり、子どもたちが真の人間として成長できる社会環境になっていないことを多くの人たちは気付いていません。特に日本の政治家はこの分野が非常に弱く、目先の経済成長や他国の脅威に対応するための集団的自衛権の拡大、平和憲法の改正、等、権力を如何に維持すべきかに力を注いでいる嘆かわしい状況にあります。保育に関しては待機児童の解消が一番の重要事項のように捉えているのですが、こどもの成長を支えることのできない社会環境と精神的な部分を含めた家族環境の変化が重要な問題なのです。少子化を経済成長のマイナス要因としてしかとらえていないよ

うに思います。政治家の視点は短期的な視点にとどまっています。100年、200年後を見据えた長期的な視点を持っている政治家は今の時点で誰もいないように思います。ですから、日本の未来のために世界の未来のために最も大切な部分、子ども達の教育、保育を如何になすべきか知恵を持ち合わせていません。この分野に於いて日本は危機的な状況にあると言わざるを得ないのです。日本の社会だけではなく世界全体がこのような悲観的な状態にあるのです。子どもたちが本来備わっている能力を呼びお越し、それを気付かせ、お互いが支え合って生きる人間本来の精神が育てられていないのです。真の教育がなされていないのです。このままでは未来は非常に悲観的な未来になるような気がするのです。この現状を打開するのが政治家の使命です。しかし、本来あるべき教育や保育のあり方を考えていない政治家がほとんどです。子どもを育てることの本質、人間は如何に生きるべきなのかという人間理解の本質や、哲学、宗教、未来に対しての正しい生き方、方向性を持ち合わせていないのであれば、正しい政策を考えることは不可能な事です。少子化が進んでいますが、保育所を増やせば少子化が解消することなど泡のような希望に過ぎません。根本的な解決にはならないと思います。

子どもがより良く育つ環境はどうあるべきなのかを真剣に考えなければならないのです。このような社会の中で母親が、しっかりとした人間関係を構築し、子どもの成長を楽しみ、支える喜びを獲得できるために今の保育施設は存在しています。子育て支援事業も同様です。この働きに少しでも貢献できればという思いで、日本の多くの保育施設は日々努力しています。